

ポタンのような小さな話

勝又弘美

三島の駅北で生まれた私の家では、賑やかな駅南の商店街を「お町」と呼んでいた。家族で「お町」に出かけるときに心弾みと、家に帰る頃の足のたるさとは、還暦を過ぎた今でもよく覚えている。

幼い頃の私が「お町」で一番好きだった場所は、大社の前のポタン屋さんだ。壁中を埋め尽くした大小のポタンはまるで宝石のようだった。母の買い物の間中、夢中でそれを眺めていた。

高校生になって定期券で通学するようになった。時々、田町駅で降りて一人で「お町」に行つた。お昼の牛乳代に貰つた小遣いを貯めて向かつた先は、本屋さんだ。文庫本の棚をつらつら眺めていると、反対側にいた文芸部の男の子が私を見付けて、「梶井はね、ちよつといいよ。」と、さも大事な秘密を打ち明けるように、梶井基次郎の魅力を教えてくれ

たこともあった。

大学生になり卒論を書くとき、万年筆屋さんで「文豪」を真似てモンブランの極太を買った。万年筆屋さんのご主人は、「万年筆は使う人の書き癖でペン先が減る。その時は削って直してあげよう。」と言ってくれた。それから二十年、いや三十年ほど経った頃だろうか、万年筆屋さんが閉店すると聞いて、私は店にとんでいった。「おじさんに直してもらうほど、私はまだ万年筆を使いこなせていません。」と言うと、「極太を買った人だね。」と、覚えていてくれ、「ペン先が減るほど物を書く人は、そうそういないよ。」と慰めてくれた。このとき新たに買った万年筆も、ペン先を損なうことなく引出しに何本かある。

三島の「お町」には、ボタン屋さんの壁一杯のボタンのように、この町に暮らす人々の、色褪せることの無い小さな物語が満ちている。